

『あいうえのだぜベイビー！』 とびら亭うわの空 (とびら9期 下山雄大)

あいうえお？あいうえの！新米パパと学ぶ、「Museum Start あいうえの」ってなに？

赤ちゃん 「えへへ、ばぶー、ばぶばぶー」

父親 「お、よーし、よし、可愛いなあ。あれ、おむつ替えなきゃ…。

やっぱ育児手伝うのめんどくせえな、花子、早く帰ってこないかな」

赤ちゃん 「何？」

父親 「え、え、喋った！？」

赤ちゃん 「驚かせて済まない。私は1兆人に1人の確率で生まれるスーパー賢い赤ちゃんなんだ。

君の子どもがその1人だと知って、さぞかし誇らしいだろう」

父親 「いや、誇らしいというか、自分のゼロ歳の息子が急に話し始める状況がつかめてないけど…」

赤ちゃん 「はっはっはっ。いやー普通の赤ちゃんの振りをし続けるのも大変でねえ。

言ってしまうえば、大人がわざと赤ちゃん返りしているようなものだからな」

父親 「そう言われても、よく分からないけどね」

赤ちゃん 「とにかく、君に言いたいことが2つある。

一つ、今すぐこのおむつを替えるんだ。もう我慢がならない。

二つ、父親である君にとって育児は「手伝う」ものではなくパートナーと「シェアする」ものだろう？君の前時代的なジェンダー観に幼少期から触れなければならないのは、もっと我慢がならないんだ」

父親 「あ、ごめんなさい…」

赤ちゃん 「素直でよろしい。せっかくだから君にとっておきの情報を授けてやろう」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>

父親 「な、なんでしょう…？」

赤ちゃん 「私が小学生ぐらいの年齢になったら、『Museum Start あいうえの』に参加させるんだ」

父親 「あいうえお…？」

赤ちゃん 「違う、あいうえの、だ！」

父親 「あいうえの…」

赤ちゃん 「そうだ、ちゃんと言えてすごいでちゅねー」

父親 「あ、うん、ありがとう……。あいうえのって、なんですか？」

赤ちゃん 「あいうえのは、子どもたちが上野の文化施設を使って遊びながら学ぶことを助けるプログラムだ。子どもの文化に対する好奇心がぎっと高まり心豊かに育っちゃうぞベイビー！なんてな！はっはっは！」

父親 「なるほど…！面白そう、ですね…」

赤ちゃん 「だろう？今度参加する赤ちゃんサミットで他の保護者にも伝えておいて欲しい」

父親 「いや、親子教室のこと赤ちゃんサミットって呼ぶのやめてくれるかな？

ところでそれはどこから申し込めばいいんでしょうか？」

赤ちゃん 「『Museum Start あいうえの』の公式サイトをチェックしよう！

赤子の手をひねるより、簡単なことだろ？」



『ダイバーシティって？』 とびら亭ちえ呂 (とびラー7期 小林申孝)

父と娘が、美術館のプログラムからいちばん身近な多様性を発見する話。

こども 「パパ、となりのハナちゃんが、土曜日に、上野の東京都美術館にいったんだってさ」

ぱぱ 「へえ、あのじっとしてないハナちゃんがね～、絵を好きになったのかなあ～」

こども 「ダイバーシティが面白かったって」

ぱぱ 「えっ ダイブしたい？バンジー？なんか飛ぶの？」

こども 「なんかおもしろそうだね～♪ わたしも行ってみたい」

ぱぱ 「ダイバーシティって、なんだろうね。美術館に聞いてみようか」

<とるるとるるとる (電話の音)>

ぱぱ 「東京都美術館ですか。(電話をかけてるジェスチャー) むすめが、友達からダイバーシティが面白かったと、聞いてきたのですが、ちょっとイメージし辛くて・・・」

「バンジーできます？ えっ？屋上は芝生の緑化中、立ち入り禁止、何人も入れず？違うか～」

「じゃあ、ダイビングできます？不忍の池あたりですか？えっ、ボートはあるけど、はすだらけ、泳がず。違うかあ～」

「あっ、ダイバーシティのことが分かりましたか、ありがとうございます。メモしますね。はい、ありがとうございました」

<がちゃん (電話の音)>



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>

ばば 「美術館のひと、「ミュージアム スタート あいうえの」ってインターネットで検索してっ
て言ってたよ (PC を開くジェスチャー)」

「あいうえお じゃないんだ～。 カシャカシャ (PC 操作の音)」

こども 「ばば、なにかなあ～？」

ばば 「あ、みつけた。ダイバーシティ・プログラム「多様な文化を持つ子供たちがミュージアム
に集まって、本物の作品をみつめ、言葉を共有する。自分と自分じゃない誰かの個性を認
め、尊重する目と心を育むか、ふん、ふん」

こども 「ばば なんか、わかった？」

ばば 「うん。登場人物が分かったよ」

こども 「うんうん、なんか、劇みたいだね。それで？」

ばば 「とびラー (「らー」をのぼす) っていう大人がいる。他に外国人の子供やおとなもいる」

こども 「とびらー？シングリッシュかな？最後にらーを付けるってハナちゃんがいってたな」

ばば 「そっか、ハナちゃんのおかあさん、シンガポール出身だもんね。でも、違うよ」

こども 「たよな ぶんか はいけい？」

ばば 「ぶんかの違ってね。たとえば、日本の中でもいろいろあるんだよ」

「夏に田舎のおばあちゃんちで、ごはんのとき、バツタみたいなのがでてきたろう？」

こども 「あつ、「イナゴの佃煮」、だね。もらって帰ってうちの冷蔵庫に入れてたよね。ママが、毎
日、「どこかにもってって！もってけ～。外にだせ～～ (怒)」(だんだん怖い調子に) て、
怒っていたよね」

ばば 「そうそう、ママが、あれ以来あまり話しかけてこない」

こども 「だからか～」

ばば 「食べたり、食べなかったり、日本にだって違いがあるよね」

「世界を見渡すとたくさんの国、言葉があるし、寒かったり、暑かったり、食べ物も違う」

「たぶん、考え方もいろいろとあるかもしれないよね」

こども 「うんうん」

ぱぱ 「いろいろな考え方がある。どうしてそう思うのかなって理由を想像することから、ダイバーシティって始まるらしいよ」

「美術館で絵や彫刻をみたりして、日本人だけじゃなくて色々な外国籍の人ともお話をするんだってさ」

こども 「ふ～ん、聴いたこともない、新しいお話がでてくるかもね。わくわくするね」

ぱぱ 「参加の申し込みしとくね」

こども 「楽しそう～だし、ままも誘ってみようよ」

ぱぱ 「え～？ ママも？」

こども 「ぱぱとままもダイバーシティ・プログラムから始めてみようよ！」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>

『世界を変える鑑賞会?!鑑賞法』 とびら亭ブル五入 (とびラー7期 香坂小夜子)

忘れられない小学五年生の子供たちと展覧会でのワンシーン

これは私がとても心に残っているある学校プログラムでの鑑賞会のワンシーンです。

先生 「みなさん、今日は5年生のみなで学校から東京都美術館にやってきました。前からお話をしているとびラーさんと一緒に展覧会で作品を鑑賞します。それでは…タロウくん、また後ろむいてますね。前をむいてください」

子供 「先生!タロウはいつも前を向かないし話を聞いていないです!タロウ前向きなよ。いっつも変だよ!」

先生 「変って言うのはいけませんよ。先生が言ってるときは皆さんは何も言わなくていいです」

「タロウくん!聞いていますか?…じゃあタロウ君は耳だけこっちを気にしててください。それではとびラーさん、今日はよろしくお願いします!」

とびラー 「はい、みなさんお早うございます!今日一緒に鑑賞をすとびラーです」

子供たち 「とびラーさん、おはようございます!よろしくお願いします!!」

とびラー 「じゃあ早速展示室へ移動しますよ!」

子供 「あの、とびラーさん!私見たい絵があるです!」

とびラー 「そうなの?」

子供 「私もー!」

とびラー 「え!?!」

子供 「とびラーさん、私もー!」

とびラー 「わー。皆、楽しみに来てくれているんだね」

タロウ 「あぁくっだらねえー…」

とびラー 「…あ…あの子さっき朝の会でも先生の方を向いてなかったタロウ君っていう子だ……私…あの子にも楽しんでもらえるかなあ…」

子供 「とびラーさん、早くいこうよ！」

とびラー 「…そうね！楽しみだね！Aチームの皆で見る作品はこちらです！」

子供 「わー大きい！」

とびラー 「皆の想像していたのよりも大きいかな？！」

子供たち 「思っていたより大きいし、色も綺麗ですっごい迫力あるー！」

とびラー 「そうだね。本物を見て初めて気付く事って多いよね！ 皆、さあ、作品をよーく見て。この絵の中で何が起こっているかな。どんな感じかするかな。見つけた事を自由に発言してくださいね。じゃあ誰から話してくれるかな？」

子供たち 「ハイハイハイハイ！！！」

とびラー 「じゃあ、花さんどうぞ」

子供たち 「えっと、この絵は今よりずっと前に描かれた様に見えます」

とびラー 「花さん、ありがとう。それはどこからそう思ったの？」

子供たち 「えっとー、絵の中の人が着ている服が今とは違うからです！」

とびラー 「なるほど、描かれた人物の服装に注目してくれたんだね。本当だね、今の服装とは違うね。細かい所までよく見て気付きましたね！」

とびラー 「他に何か発見はありますか？」

子供たち 「ハイハイハイハイ！！！」

とびラー 「皆、名前を呼ぶから一人ずつ順番に話してね。あ、ここから、こう思ったのね！なるほど～！さっきもここに注目してくれた子がいたけどまた違った感じ方だね。皆で見ると色々な見え方が共有出来て鑑賞が深まるね！」



「皆、沢山話してくれてありがとう！これで全員話してくれたかな…。あ…タロウ君…まだだね」

「タロウ君は一度も手を挙げなかったけど、絵を誰よりもよく見ていた。そして展示室の中ではずっと静かに絵と向き合っていたな…タロウ君？」

タロウ君 「んー？」

とびラー 「タロウ君はすごく良ーく絵を見ていましたね～！何か気が付いた事を皆に聴かせてくれるかな？」

タロウ君 「えっとー、この絵は空と海が広々と描かれていて空間が繋がっている様にみえた。足を開いてその間から顔を逆さまに見上げてみると海が空の様に見えて面白かったです！」

子供たち 「えータロウ、何それー！またタロウが変な事言っているよ！相変わらず、変わったことばかり考えてる！」

とびラー 「皆静かに！タロウ君の話最後まで聴こう！」

「タロウ君、逆さまから覗いてみたら海が空の様で立ってた時とはまた違った世界に見えたってことかな？」

タロウ君 「はい、そうです！」

とびラー 「皆、今、タロウ君がとっても面白い発見をしてくれました！皆も一緒にやってみましょう！タロウ君、こうやって、こうしてみるの合ってる？」

タロウ君 「はい、合ってます」

とびラー 「天橋立をみるポーズだね。皆も逆さまにみえてるかな？」

子供たち 「みえてます！へえーおもしろーい！でもとびらーさん、この体勢キツイよ～(笑)

私、体が硬いから股の間から覗くの大変(笑)」

とびラー 「本当だね。大人の私はもっと大変よー笑！でも楽しいなあー！最高だなあ！」

子供 「とびラーさん、なんで？」

とびラー 「だって、それぞれの言ったことを否定しない。そこから皆の見え方、想像力と笑顔が広がるばかり」

「皆が満たされる、幸せな時間が今流れているから！」

「みんな、そろそろ最初にみんなが集まったお部屋に戻りますよ」

子供たち 「えーっ、もうそんな時間なの」

とびラー 「そう、あっという間だね。じゃあ皆、はじめと同じ席についてね。終わりの会が始まりますよ」

子供たち 「はい！」

先生 「みなさん、お帰りなさい。とびラーさんとの鑑賞会は楽しかったですか？」

子供たち 「はい！先生、とっても楽しかったです」

先生 「それはよかったです…とびラーさん本当にありがとうございました。それではもう一度ちゃんと、とびラーさんにお礼を言いましょう…タロウくん。今だけは後ろを向かずちゃんと前を向いてください！」

子供 「先生！」

先生 「大丈夫です。タロウくんには先生が言いますからみなさんは何も言わなくていいですよ」

子供 「そうじゃなくて、タロウくんは後ろを向いていいと思います！」

先生 「どうして？」

子供 「タロウ君は股の間から前をみるからです！」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>

『息子、本当の「美しい」が少しわかった?』 とびら亭茶わん (とびら-9期 平本正史)

親子が都美のWSへ参加

息子は本当の「美しい」に少し触れることができるのだが

それよりも付き添っていた父ちゃんの本当の姿 実は?

くにお 「父ちゃん、上野公園ってこんなに広いんだ!？」

「なんかあそこに行けなくてよ！」

「動物園かぁ!父ちゃん動物園行こうよ！」

父ちゃん 「どうだ、上野公園すごいだろう！」

くにお 「うん!パンダパンダ!おれ!パンダが見たいんだよ!前から言ってたでしょ」

父ちゃん 「いや、今初めて聞いたわ。だが残念〜!今日は動物園じゃないんだ。ほら反対を見てごらん」

「東京都美術館っていうんだ。今日はあそこに行くよ」

くにお 「え〜なんだよ〜」

「お、何あれ!?ミラーボール?おっきいねえ！」

「おれと父ちゃん、こんなに歪んで見えちゃうよ?ねえ、一緒に写真撮ろうよ！」

父ちゃん 「ハイチーズ。はは、面白いだろう」

「<マイスカイホール 85-2 (ハチジュウゴノニ) 光と影>っていうんだよ」

「昔はよく通っていたなあ〜。」

くにお 「そうなの?パンダ見に行ってたから？」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る!とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>

父ちゃん 「それはお前ね。実はね・・・教えな一い」

くにお 「何だよそれ・・・」

父ちゃん 「いまは午後1時か。まだ間に合うね。都美の中に入るよ」

くにお 「へ？とび？家作る人？」

父ちゃん 「違うよ、東京都美術館を略して“都美”っていうんだよ」

「今日はね、都美の中で展示されている筆と墨で書かれたいろいろな書を見るんだ」

くにお 「いわゆる習字ってやつかあ。でも、おれあまり行きたくないなあ」

「だって正月の書き初めの宿題、本っ当にいやなんだもん。去年の「美しい」って字、何が美しいだよー。全然うまく書けなかったもん」

父ちゃん 「そうだったな。しまいには父ちゃんが書いたの、お前学校に出さなかったっけ？」

くにお 「し、知らないよ、そんなこと！」

父ちゃん 「まあいいよ」

「今日はね、他の人たちと一緒に書を見たり書いたりするよ」

くにお 「とうちゃんさ、今の話、聞いてた？」

父ちゃん 「まあ。そう言うな」

「見てごらん、今日はいろんな国の親子が来ているね！」

「楽しみだなあ！」

くにお 「正月じゃないのに書き初めかあ・・・。ドキドキしてきた」

父ちゃん 「そうかあ～、ワクワクしてきたか！」

くにお 「ち が う！ド キ ド キ！緊張してきたの！」

父ちゃん 「どうやら大人と子ども、分かれてやるみたいだね」



「なになに？まずは展示を見てから自分たちで書いてみよう、だって。それじゃあ、またね！」

くにお 「ま、やるしかないかあ〜」

「へえ！墨でこんな文字書いている！」

「こっちは濃い字と薄い字を混ぜているのかー！」

「みんな色々好きに描いているんだなあ」

「これなんか、へえ〜！！」

父ちゃん 「トントンの、どうだ？」

くにお 「あ、父ちゃん。父ちゃんも見に来ていたんだね」

「この絵、すごいね！」

父ちゃん 「どこからそう思う？」

くにお 「だってさ、こんな字、学校で書いたら先生に怒られるよ？」

「だけど、なんか夢中になっちゃう！」

「父ちゃん、おれ、「美しい」がなんなのかわかった気がする！！」

父ちゃん 「お、面白いこと言うじゃないか。みんないろんな形を描いているだろう」

「一つの考えにとらわれていないんだよ。これがアートの醍醐味なんだ」

「アートって面白いだろう。また部屋に戻って今度は僕らでオリジナルの書を書いてみよう！」

くにお 「とうちゃん、今日楽しかった！」

「隣にフランスから来た女の子がね、筆をピッピッてはらって模様をたくさん作っていたの」

「他にも韓国から来た男の子とか、タイから来た子もいたんだよ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>

「みんな自分たちの言葉を書いたりしていて、みんな違うんだけどぜ〜んぶ楽しかった！」

「もっと早くからここ知っておけばよかったな〜！」

父ちゃん 「だろ〜！アートに触れる、楽しむに早い遅いはないんだよ」

「どの国の人、どんな年齢の人でも、いつでもアートを楽しむことができるんだ」

くにお 「そうなんだね。ま、いま知れてよかったおれ！」

「あとさ、とびラーっていう大人の人達いたじゃん」

「とても優しくって色々教えてくれたの」

「グループのみんな楽しんでやった」

「ああいう大人になりたいなあ！」

「そのアートっていうもので人を楽しませてくれる人！」

父ちゃん 「はっはっはっ、とびラーのことだったら父ちゃんになんでも聞いて」

くにお 「え、なんでよw」

父ちゃん 「さっき父ちゃん、よく通ったなあって言ってただろ」

くにお 「うん」

父ちゃん 「父ちゃん、案内うまかったと思わない？」

くにお 「まあ、確かに」

父ちゃん 「なんてかわかっただろ？」

くにお 「うーん・・・ん！？え！え〜！」

「わかった！」

父ちゃん 「そう！言ってごらん」

くにお 「パンダが見たかったからだ！！」

父ちゃん 「バカヤロウ！」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<Museum Start あいうえの 編>